

ともに 歩もう 石巻だより

石巻市立北上小学校の図書室の壁いっぱいには、色とりどりの物語の世界を描き上げた絵本作家の1人、飯野和好氏の絵と共にお届けする特別号です。「ねぎぼうずのあさたろう」作者でもある飯野氏は、朝日新聞では朝刊連載小説「宿神」の挿絵も描きました。

食べて笑った一緒の日々 今も忘れない3歳

女川町の街並みが次々に整っていく。この夏は町役場の新築庁舎が完成した。変化の大きな街で変わらないものもある。山の緑。薫る風。交わす笑顔。折々に思い出す言葉がある。町内で



理容店を営む横山亮助さんと美和子さん夫妻が、飯店舗から新築店舗へ移る時、不安をこらえて語った言葉だ。

「あそこで、がんばれたんだから、これからも、がんばれる」

「がんばれた」は、「がんばった」とは違う、重みのある言葉だ。

「あそこ」とは、約8カ月に及ぶ避難生活を送った町の総合体育館だ。

町外への避難も選べた。が、体育館を選んだ。そこに娘がいた。9歳の孫娘も一緒だ。「ここにいたら大変だから」と娘がいくら反対しても、横山さん夫妻はがんとして動かなかった。

娘は、夫と3歳の息子を捜していた。気丈にも、夜が明けると、1人で捜し

に出てしまう。夫妻の前では取り乱す姿を決して見せない。とにかく、そばにいよう、と心を決めた。

9歳の孫娘は、放心したように何も話さない。一言、二言、言葉が漏れれば、あいつちを打つ。それを繰り返す。娘も一度、遠い目をしたまま、低い

声でこう漏らしたことがある。「パパと一緒にだよね」。「んだ。んだとも。一緒だとも」と即座に返した。3歳の子は父と一緒に。それが娘の心の支えであることを痛いほどわかっていった。

3歳の子はまた舌足らず。横山さん夫妻にはそれが可愛かった。9歳の姉を「ねえね」と呼び、ついて歩く。姉のすることすべてをしたがり、「だめだ

から」と言われて、泣いた。美和子さんが用意したシャボン玉で姉と一緒に遊んだ。虹色の玉を大喜びで追う。

皆で囲んだ食卓で小さな口をあーんと開けて待っている。美和子さんがご飯を入れる。まだ待っている。納豆を入れる。口を閉じる。ご飯と混ぜてから口に入れるのは嫌。愉快だった。

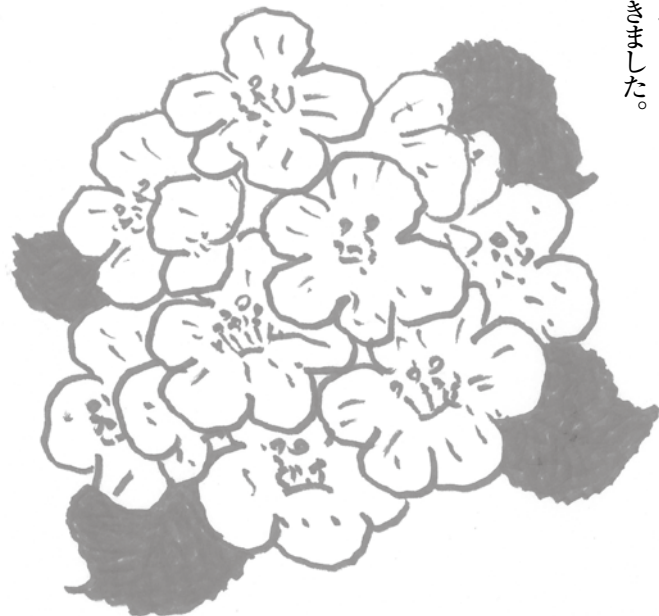
更地になった自宅跡地では、小さなこいのぼりと小さな青い風車が3歳の子の帰りを待っていた。復興工事が始まって立ち入り禁止となる日まで。

石巻市の日和山へ上る坂道でも、しばらくの間、5本の風車が回っていた。西城江津子さんが置いた。次女の春音ちゃんのために。一緒にいた4人の子のために。

突き刺さる「言葉」

あの日。

6歳の春音ちゃんは山腹の日和幼稚園にいた。地震後、ほかの子と一緒に園のバスに乗せられ、山を下り、海へ向かった。バスは、海辺の子も乗せていた。保護者が次々引き取りに来た。春音ちゃんたち5人の家は、海とは



反対の内陸だった。バスは、5人を乗せたまま園へ戻ろうとして渋滞にはまり、坂道で流され、炎に包まれた。その後。

坂道を造花で飾ろうと江津子さんは100円ショップへ行った。風車があった。春音ちゃんたち女の子にピンク色を、男の子には水色を買った。

造花を買い足しに行き、もっと大きい風車を見つけて、また5本買った。やがてその脇に看板が立てられた。

「献花等の自粛のお願い」「花壇等は工事に支障となりますので、予め撤去へ

下さるようお願いします」と書かれて
いる。復興工事が控えていた。もちろ
ん、仕事を妨げるつもりはなかった。

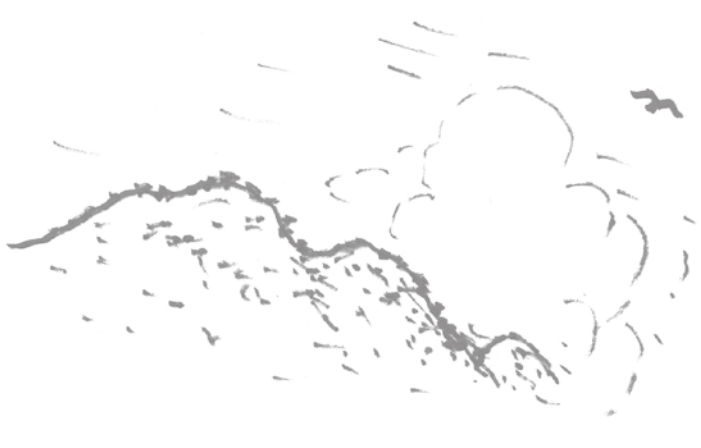
昨年。

佐藤美香さんは年初から落ち着かな
かった。長女の愛梨さんもバスに取り
残された園児である。6歳だった。

春には小学校を卒業し、中学校に
入学するはず。卒業を、入学を、祝っ
てあげたい。中学校の制服を注文した。
制服につける名札も注文した。準備が
進み、万端整って、ひとときの喜びに
浸っていた2月7日の夜のことだ。

自宅に電話がかかってきた。女性の
声で「佐藤様のお宅ですか」「はい」
と答えると、畳みかけてきた。

「今6年生の親御さんですね」



「はい……」と応じつつ「どこからそ
の情報を入手したのですか」と尋ねる
と、「名簿会社のものをもとに連絡し
ました」。塾の勧誘のようだ。言いた
くない言葉を口にした。「うちは震災
で亡くなっているのですが……」

淡々とした声が返ってきた。「それで
したか。でしたら、削除しておきます」。

電話は切れた。

「後悔しています」

それから2日後の2月9日。

郵便受けに封書を見つけた。

宛名は「佐藤愛梨様」。進学塾から
だ。中身は抜き取って捨てたが、封筒
は宛名に折り目がつかないように畳ん
で手元に置く。家族には見せていない。

美香さんは語る。「複雑ですよね」。

ここでは愛梨は生きているんだな、と
思う部分もあって。愛梨に届くのはこ
ういうものしかない。普通にお手紙が
届くことはない。なんだろうなあ。
いろんな思いが。複雑……」

今年5月。

愛梨さんは14歳の誕生日を迎えた。

美香さんはプレゼント選びにいつも
迷う。何を欲しがるか。今年も財布
を選んだ。こう思った。

14歳は、親の手を離れて友達と出か

ける年頃だろう。仙台市内は私よりも
詳しいだろうな。すっかり生意気に
なっているんだろうな。

今年8月。

美香さんは東京都内で講演した。

当時の話をした。家にいた。直後に

幼稚園バスの時刻表を見た。「午後3

時7分発。まだ発車前。安心した。

家は浸水して大規模半壊。あの時、家
族の誰よりも安全な場所にいたのが愛
梨さんだった。まさか地震後にバスを

出すとは。だが、自責の念も吐露した。

「あの日の朝、娘を起こしたことを
後悔しています」。インフルエンザで休
ませた後の金曜日だった。もう1日休

ませていれば――。

美香さんに続き、愛梨さんの妹、小

学5年生の珠莉さんも登壇し、「愛梨
お姉ちゃんへ」と手紙を読み上げた。

「お姉ちゃんへは、元気ですか？ 珠

莉はすごく元気だよ。友だちとは、な
かよく遊んでいる？ 珠莉は、友だち

となかよく楽しく元気いっぱい遊ん
でいるよ。珠莉は、お姉ちゃんがいな
くなつてすごくかなしかったよ。また

お姉ちゃんと会いたいなあ。だけど心
の中では、ずっと一緒にだよ」

3年前の手紙だ。自ら書きたくなつ
て、姉の仏前の机で書いた。「一緒」

は「と糸と者。1字1字丁寧に記した。
言葉にこめた思いは今も変わらない。

あの日は3歳だった。姉のことは母
をまねて「愛梨」と呼んでいた。

「お姉ちゃん」と口にするようになつ
たのは、小学校入学後。姉妹で通う児
童を目にするようになってから。

「ずっとずっと大好き」

手紙はこう続く。

「もしお姉ちゃんがいたら、ママのお
つかいができるし、おべんきょうも教
えてもらえたと、ときどき思ったりす
るよ。お姉ちゃんがいてくれるだけで、
珠莉の世界が変わっていたよ。どんな
にどんなにお姉ちゃんがいたらいいか
というも思うよ。

ほかのお友だちは、きょうだいがい
て、いっしょにお出かけしていたり、
おつかいをしている所を見るといいな
あと思ったりするよ。

きょうだいがいると遊んだり、けん
かをしたり、ないたり、おこつたり、
わらつたりできて、いいなあと思うな。

だけどお姉ちゃんと一緒にいた時は、
すごくながよかったね。一緒にごは
んを食べて、一緒に遊んで、一緒にわ
らつたりしたね。ごはんは、ママが手
作りしてくれたハンバーグがおいし
かったね。これからもずっとずっと一
緒にいてね。お姉ちゃんのことずっと
ずっと大好きだよ」

ついて歩き、困り果てた姉にはたか
れ、泣いたことは、全く覚えていない。
姉との楽しい日々だけが、3歳の子
の記憶に、確かに刻みつけられている。

の記憶に、確かに刻みつけられている。

萩原浩氏の本をたずさえ 息のむ最後の1行

あの日6歳だった子に宛てた高校進学塾の案内書——。そんな石巻市の母親の話に萩原浩氏の短編『成人式』を思い出した。着物のカタログが届いたという物語は、実話だったのか。

『成人式』は、萩原氏の直木賞受賞作『海の見える理髪店』に収められている。表題作を含め、収録の短編6編は『小説すばる』の2012年12月号から15年12月号に載った。

表題だけでもこみあげる。三陸沿岸の海が見えた建物がよみがえる。

6編とも、あの日とは別の時間、別の土地の物語だが、主人公の思いはあの日の喪失感に通じ、物語が進むにつれ、それはくるまれていく。

萩原氏を仕事場に訪ねると、壁には浅賀行雄氏の原画。萩原氏が朝日新聞夕刊で連載した小説『愛しの座敷わらし』の挿絵だ。その連載は、夢枕獏氏が朝刊小説『宿神』を書き、飯野和好氏が挿絵を描いていた時期に重なる。

『成人式』は本の中の最後の作品だ。2編3編続いた短編を本にまとめる構想が生まれ、通底するテーマに「家族」「時間の流れ」を見いだした。全体を結ぶ最後の作品を考えた時、子どもに先立たれることもある、と思



至った。

実話ではない。想像して描いた。

萩原氏には2人の子がいる。「もう2人とも三十を超えたんですが、七五三や入学式前、成人式前もいきなり封筒が送られてきました。うちは『気持ち悪いね』で済みますが、亡くなっている方にも届いていると思うと、すごく罪作りなことじゃないかと感じて」

『成人式』殴り込みへ

物語は夫の述懐から始まる。ひとり娘が4歳だった時に撮影したビデオを妻に内緒で見つめる。娘は、5年前の3月の朝、亡くなった。15歳だった。「行ってきます」と家を飛び出す娘に、「おう。急げ」と応じた。それが最後だった。夫は「なぜ、あんなこと

を言ってしまったんだろう。あの日以来、私はそればかり考えている。」

通学途上の交通事故だった。娘を失ってから夫婦の会話は減った。娘を「よけいなことを喋りすぎると、思

わぬ時に、過去のなにがしかの記憶の蓋が開いてしまう。それが怖いのだ」

物語は夫の視点から描かれる。着物のカタログを手にした妻は「指先を震わせて開封し、中身を取り出したときに、それを引き裂こうとした」。

妻はつぶやく。「一月なんて早く終わっちゃえばいいのに」。前半、その言葉で夫妻の悲しみの頂点を描ききる。

萩原氏は「どうしようもない悲しみや怒りを描くのは自分もつらかった」。

いつも気持ちを入れて書くので。若年性アルツハイマーを題材にした長編『明日の記憶』でも。「ふざけるな」と言われることを恐れつつ、そうでなく思ってもらえるように。

『成人式』の執筆中は、震災で子どもに先立たれた親が数多いことに気づいた。重圧を覚えつつ、もし自分もそうなら、と気持ちを持っていた。

悲しみの頂点を越えるのは夫の一言「成人式に出てみない？」だ。

「替え玉受験つてあるだろ。あれと一緒」「替え玉成人式」と説く夫に妻は「わたし、四十五だよ」。夫は返す。「だいいじょうぶ。お前なら」

ここから物語は転調する。萩原氏は「成人式へ殴り込みをかけ

るといのがみそでした。忘れようとしたことのふたを開けられたら、どれだけ腹立つか。もういっそ、こっちら、開けられた現実の中へ踏み込む。自分なら、そうするかもしれない」。

美肌に励む妻。夫妻の軽妙な会話が楽しい。萩原氏は「どんなに悲しいことがあっても、人間って、普通にうぬぼれたり、おバカだったり。そこを後半は出していいこうと考えた」。

殴り込みは成功するか。汗と涙と笑いに実話とみまがう終幕で夫はカメラを構える。「たす一は？」と問い、15歳の娘が父へ返していた言葉を思う。

「三」。物語を結ぶ言葉でもある。今は1足す1だけど、実は3人なんだよ、との思いをこめたキーワードだ。

萩原氏の作品はどれも、最後の1行で息をのむ。もう一度、読み直さずにはいられない仕掛けがある。

『海馬の尻尾』独り者たち

近刊の長編『海馬の尻尾』もそう。

もつとも、これは冒頭から血しぶき飛び散る場面へ突入し、まるで少年漫画だ。ヤクザの若者が主人公なのだ。彼は下つ端ながら無敵の強さを見せる。

独身で、長身のイケメンらしい。が、この若者、酒が入ると、暴力にのめりこむ。「自分が生きていると思えるのは、こういう瞬間だけ」だから。

彼の威勢のよい語り口で物語は、

進む。「世間は高校中退の俺を学がないと決めつける。カシラにしたって俺をろくに言葉も知らない馬鹿だと思っ
ているようだが、そんなことはねえ」

しかし、ついにカシラに命じられて病院へ行くことになり、若者の家庭環境が明かされる。「俺の母親は、俺の体より診察代の金額を心配するような女だったし、小学三年の時から一緒に暮らしていた義理の糞つたれ親父は、俺の体に傷を増やすほうの男だった」

萩原氏の本領発揮である。語られるのは無垢な少年の過酷な日々。癒えない傷から目をそらすように少年時代をも突き放す口調が一層、胸に迫る。

問診票の「酒が原因で大切な人との人間関係にひびが入ったことがありますか」という問いが想定する人生に彼は内心、かみつく。「俺には『大切な人』なんかいない」「人間関係』もない。あるのは上下関係だけだ」

若者が受診したのは精神科。反社会性パーソナリティ障害の診断を受ける。それは変えられるのか。自問する。入院する事態に陥る。ジャック・ニコルソン主演の米国映画『カッコーの巣の上で』を思わせる展開だ。

病院では若者を慕う少女が登場する。天真爛漫。虫もへつちやら。が、病状は深刻だ。若者は語る。

「凄いな、あの子は。俺よりずっと生きて
いる価値のある子どもだ」。

「大切な人」が出来る。少女へ手を差し伸べる若者の実に不器用なこと。院内の独り者たちが応援する。「人間関係」が生まれる。

最終頁。独りぼっちじゃないよ、最後まで。勇気が湧いてくる結びが待つ。萩原氏は「僕自身は、小説が何かをものすごく変える力はないと思うんですけど」と語る。「1冊の本で人生変わったまると。僕も変わったことないので。でも、何かの参考文献に、いくつかある選択肢の一つとして、読んでもらえたら」

2度目の原発事故

『海馬の尻尾』には副題がある。

『2度目の原発事故』だ。

若者は病院の待合室で壁に据えられたテレビのニュースへ目を向ける。

「宇宙服じみた防護服を身につけた

人間が何人も廃墟の中を彷徨い歩いている。まるで他の惑星からの宇宙中継のようなこの光景も、いまじゃすっかり見慣れている」。

若者は続ける。

「二度目の原発事故が起きてから、二年が経つ」

次の言葉にぎくりとする。

「当初は一色に染まっていた報道が、ふくらみすぎた風船の空気が抜けたように急速に萎んでいった理由は、俺でもわかる。みんな現状を知りたくないのだ。知るのが怖いからだ。忘れたいのだ、すべてを」

これは、近未来でなく現代の話か。

2度目の事故は、テロリストが乗った飛行機が原発へ突っ込んだのだ。それは病院にも影を落とし、物語は次第にミステリーの色合いを帯びてくる。若者は、奇跡的に助かった乗客と遭遇する。乗客の言葉にも、どきりとする。「だいじょうぶです。放射性物質は病原菌じゃないので。人にはうつりませんから」

次の描写に至っては、1度目の事故、東京電力の福島第一原発事故の被災地、帰還困難区域そのものだ。

「人間の消えた町は、死体のように静かだった。いや、静かなって生やさしいもんじゃない。無だ」

萩原氏は「忘れるなよ」と言うつもりで書いています」と話す。「人間って忘れやすい。というか、世の中が忘れさせようとしているんじゃないか。だから、『今回の震災のこと、原発事故のこと、思い出せ』と」

萩原氏自身、3カ月後の11年6月、宮城県の沿岸部を訪ねた。石巻市の大川小学校も訪れた。そこから雄勝町へ向かい、町の半島部もめぐった。流さ

れて公民館の上に乗せられたバスも見
た。強烈なおいを覚えている。

「その時は事実の前にたじろぐというか。無力感を感じるといいうか。こんなフィクションを書いていいのかしら、と」。迷いの中で書き上げたのが『海の見える理髪店』だった。

「で、今頃になって、あそこで見てきたことを書かなきゃ、という気持ちになって。書く人間としてはそれが自分の出来ることの精いっぱい。そうして仕上げた『海馬の尻尾』」

奇跡的に助かった乗客は、主人公の若者のまっすぐな言葉にさとされ、めざめたように言い切る。

「記憶を貯金します」

福島県浪江町の記憶も。原発立地町でなく隣接町なのに、今も広大な帰還困難区域を抱えることを。そこには今年9月に入っても、空間の放射線量が石巻市や女川町の200倍以上にも達する地があることを。覚えていたい。

